



三月の雪に驚くことはないのだが、除雪車の出動は初めてでなかろうか。
聚感園の榎の大樹の千の枝に春の淡景が見事である。



公園内は今、椿の花が満開である。その花も雪に覆われた。億年の時の流れのどのあたり紅き椿の花ひろうのは(安水路子)の短歌である。



雪割草の名のごとく、春一番に雪の間から咲き出す花である。最近、交配による色々な品種が出ているが、やはり原種は凛とした品格がある。

小さな旅・寺泊



月刊 第 596 号

NHK日曜朝の定番「小さな旅」でふるさと寺泊が登場した。多分町につながりのある方々の所へは「寺泊が出るよ」と電話連絡が入ったのではなからうか。

あの耳に馴染んだテーマ音楽の流れる中、春浅い海沿いの風景、上の外れの山田の集落で五十年余漁師をしている足立仁さん(わが同期で今年一緒に古稀を迎える)のミズダコ漁の様子

が紹介された。寺泊は豪雪と言われている今年は勿論十二月から寒波と雪に見舞われたものの量的にはさほどのことはなく除雪車の出動などむしろ例年より少なく五指で足りる程度。とは言うものの冬の厳しい風と波、その僅かな風を見計らったの出漁、それだけに水揚げの喜びはひとしおと言ふことになる。二十キロを超える「あたぐらもん」が獲ればつい顔もほころぶと言ふもの。山田の村には港が無く沖にのた(波)よけのテトラポットが並べられ家並と道路を守る防波堤から家の裏へトンネル状にくり抜きの船揚げ用の通路があり、そこが地下格納庫と言ふ形になっている。

寺泊ではかつて磯見漁師の家は片町から松沢町へかけて(小泊地区)浜側に集中しており、家の裏は海から直接丸木舟を引き揚げられる造りになっていてその上の二階部分は漁具置き場やハネダシと呼ばれる和風ベランダがあり裏二階から出られるようになっている物干しや物見台の役割りを果たしていた。舟と家庭とが一体となっていて、それは南部の馬と家庭が一体となっている曲家に通じるものと思われる。

のタコを八千余円他に数種の地魚を釣り落として早速特別仕様の台車に乗せて行商に出かける。お得意を一軒づつ廻りながら積んでいる魚の名を全部紹介するのがチヨノさんの口癖である。四才で西蒲原の農村から養女に來たのだと言ふから根っから濱育ち同然。この番組では紹介されなかったが仲々の信心家でご縁あるお寺へのお参りや法話会への参加は欠かさないと言ふお人柄でもある。釣り場へ入り仕入れた魚で商売させて頂いているのが元気の源で有難たい感謝の毎日との感想。

場面は一転してその獲れたミズダコが鏡りにかけられる漁業組合、登場する主役は当年八十五才町内を行商するスケゴの五才風チヨノさん。当日は十キロ

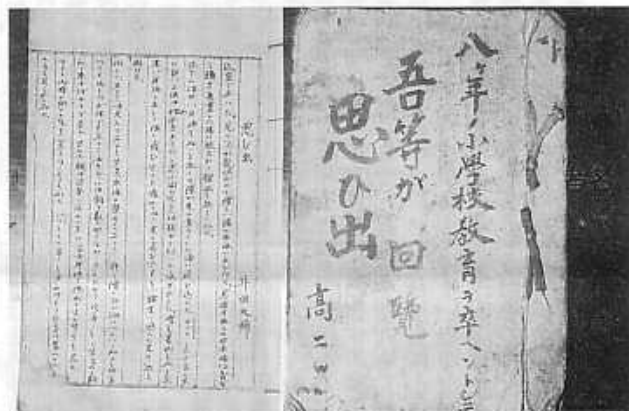
先号で紹介できなかったが長岡市議員の寺泊地区での選挙は高橋誠氏と古川原直人氏が



可動堰の下流に架かる橋の中間地点が寺泊(長岡市)と分水(燕市)の境。その河川敷で低水路の工事が進められている。北海道はじめ東北ナンバーの車が活躍中。(磯町 小松善憲さん提供)



改装工事が終って、新築校舎のように美しく整備された寺泊小学校。卒業式、入学式の季節である。(小松善憲さん提供)



卒業文集である。八ヶ年とあるのは高等科二年生のものであろう。印刷で各自に配布のものではなく手書き回覧の文集である。(小松善憲さん提供)

当選された。計らずもお二人は今年還暦を迎える同期、まさに団塊の世代の代表。高橋氏は町議、議長、町長と言う経歴、古川原氏は永年役場職員として各課係長、課長の経験者として行政に明るいお二人ですから良きタッグを組んで地域委員と協力して寺泊地区の発展に大いに活躍して頂きたいものである。

私論ながら水害震災雪害と災害過敏症気味の昨今、地震に強い地盤と雪のない寺泊を老後を安心して過ごすリゾート住宅地として、文化面と医療面の充実を計りながらアピールできないものだろうか。老後が最大の不安の時代、そんな町づくりもあってよいのではなからうか。

「あつたらもんだ」

さとうのぶひと

冬の終わりを告げる、といふよりは、春の知らせをもたらす出来事が、よそでは次々と起っています。春一番、黄砂、杉花粉、そして桜前線。この原稿を書いているうちにも庭木の梅が蕾をふくらませ、今まさに開花寸前です。農家の畑仕事が始まり、ジャガイモの植え付けが終わったようです。自然は裏切らない——それが実感として伝わってきます。

終わってみれば「一瞬の冬」に過ぎなかったのですが、雪国に住むものにとって、四季のうちで冬がもっとも長く感じられる。積雪の多い山間地の人々のあいだには「冬さえなければ」という声もよく聞かれます。それだけに、春日のぬくもりの中には、何ものにも代え難い至福感があります。

寺泊の穏やかな春の海は、青く澄み切っています。冬の、猛々しくも牙をむいた灰色の海はどこに行つたのでしょうか？ 今、寺泊の海は静謐と慈愛に満ちています。

永らく空き家にしておいた生家の片付けをやつと始めました。家具、道具、衣類など十年来の埃をかぶつて汚れ、甚だしきに至っては錆び付いたり腐つたりしています。もともと捨てるに忍びないものであることか

らそつとしておいたのですが、こうなつてしまつと全部がゴミの山に見えました。一度骨董屋が入り、彼らの価値基準で持ち出されたものもありますから、なおのことそう見えました。

ゴミとして全部出そう。最初はそう考えていました。しかし、いざ整理にかかるとなかなか捨てられないのです。よく父母が使つていた「あつたらもんだ」という言葉が甦りました。「あつたら」は「あたり」の転訛で「広辞苑」によれば「可惜」「惜しむべき」と書きます。「あた

ら若い命を」と言う時の「あた」で、「もつたいない」という意味です。

この「もつたいない」という言葉は先頃、国連や日本の国会でも取り上げられました。日本の伝統文化に組み込まれており、翻つては「わび」「さび」に通じていく思想であると思われ

れます。

骨董屋の目に留まることもなく、誰が見ても無価値の出来の悪い小皿一枚を手にとって、その図柄から幼少時の貧しい食卓の記憶が彷彿しました。この記憶は誰のものでもない、自分一人のもので、柳宗悦や白洲正子の鑑識眼は必要ありません。

この小皿に価値を与えるのは自分だけなのです。「あつたらもんだ」なのは「記憶」という価値です。

南魚の旧家土蔵の取り壊しに



港町の会館で笹川良子さんの手作りの紙芝居のあと、寺泊の方言についての取材を受けた。どんな方言がとび出したのであろうか。



同じく方言についての取材を受ける佐藤、中村の二人。急には仲々思い出せなく「お互あかあかした」。結果的には「あっさきゃー」。



高齢者社会と言われる中ではあるが、お寺からは高齢者の姿が消えてゆく。石段だらけの寺泊の寺は、足に自信のないお年寄りには越すに越せない石段である。

立ち会い、大正から昭和初期の大量の雑誌をタダ同然で手に入れた古本屋のK君。東京の古書市で大もうけしたと話してくれました。古写真、古フィルムが発見で、新潟県の近代史研究に大いに貢献したと自慢気に語る骨董屋のN君。

彼女は市場で古書、古物、骨董品の新しい価値を創ります。売手と買手がせめぎあい、思惑がぶつかり合う生々しい資本主義の世界です。「記憶」という価値はこういう世界とは無縁です。また、残余の価値、つまり「あったらもんだい、まだ使えるのにな」というのとも少し異なっています。

わたしとしては、この出来の報告です。時は6月20日、会場は写真にもなく六〇〇号を迎えます。縮刷版「ふるさとだより三十年」をめぐっていたら、珍しく号外ともいべき特集号が見つかりました。昭和46年7月20日号と8月20日号の間に挟まれて、発行日は近接の7月30日になっていきます。四ページ立てで、この時期にしてはふんだんに写真を使っています。記事の内容は「ふるさとだより十五周年記念会」の報告です。

よれば、聖徳寺さんの庭園と庫裏の大広間と見受けられます。この参加者がすごい。衆議院議員、県会議員、町長、郵便局長など。衆議院議員は日を間違えて遅れてきたらしいのですが、来賓、招待客のほか東京方面からの参加者、遠くは大阪、広島などから来られた誌友も名を連ねています。しかし圧倒的に多いのは寺泊町の誌友です。参加総計は、お手伝い、アトラクションの地元民謡団体、芸者さんを含めておよそ一五〇人以上。一大行事でした。誌面には写真とともにその様子が書き込まれ、飲食の決算書まで付いています。大勢の誌友に支え

新潟市	野沢	長谷川	英好	美知	健一	吉弥	丸山	藤弘	島谷	大味	高橋	鈴木	納谷	樋口	綾子	東京	都	相模原市	教賀市	神奈川	川崎市	藤沢市	新潟市
野沢	英好	美知	健一	吉弥	丸山	藤弘	島谷	大味	高橋	鈴木	納谷	樋口	綾子	東京	都	相模原市	教賀市	神奈川	川崎市	藤沢市	新潟市	野沢	英好
金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元	金三千元

脱帽です。大勢の誌友に支えられた編集体制と、多様な記者体制の為せる技、としか他に言えないようがありません。「ふるさとだより」の得意絶頂期でした。一時代を画するピークだったと言えます。

市川 正雄 金三千元

小波会三月旬会詠草

兼題 斑雪・落の薑他当季

トネルを

抜けて上州斑雪

水沢 蕉子

山間の

出水に崩れ斑雪

江原 汀子

山里の

斑雪に続くけものみち

竹内 霍山

流木の

砂にうもれて斑雪

内藤 蓮子

良寛の

手毬の里や斑雪

大越碧水子



船が港へ入るとすぐ魚の選別となる。船の上ではハタハタが選り分けられている。今日は仲々の大量のようで、型の良いものも沢山獲れた。

落の薑

動き始めし水車小屋

小形 美代

ここからが

辿る山道路の薑

小島 温石

土の香と

共に摘みけり落の薑

外山 海子

鶯の

声に佇む散歩道

能登 頑牛

春耕や

土の手応え鉄に手に

中村 流瓢

春障子

開らき夕日と向き合えり

加勢 白汀



赤モノと呼ばれるものには高級魚が多い。タイを筆頭にカナガシラ、キミヨ、ノドグロ、アマダイ等々。今日はキミヨ、カナガシラが主体。

雛の段

飾る町屋の華やげり

外山きよし

蘭展や

花の教程人の数

小島 冬扇

昨日待ち

今日取り朝餉落の味噌

広瀬 洋子

あとがき

東京寺泊会の会長さんが三上喜久治さんから橋本寛二さんに代った。五代目の会長さんと言ふことなるうか。三上会長さんには古川原さんのあと五十周年と言う記念の節目を乗り切つてパトントッチ、ご苦労さまでした。今度は長岡市となるわけ

ですが寺泊会には変わりないので、そこから新しい感覚での会のいよいよの発展を期待するところ。ふるさとだよりも何等かの形でお手伝いして行かねばならない立場ながら七月の六百号を以って一と先ず終刊と言う予定であり、終刊に当たっては夏の寺泊多忙な季節が終ったあとで思い出の集いなど開催したいと思つていますのでそれに合わせてふるさとを訪ねる予定などたてて頂ければと願つております。先日BSNと言う地方テレビ局から「寺泊の方言」についての取材がありました。急に言われてみて方言とはいひの間に縁遠くなつてゐるのをつくづく感じた次第です。港町の高輪の



桜鱒は魚の貴婦人と呼んでよかろうか。寺泊では川マスと呼ぶ。3月16日から解禁。キロ当り1万円もの値がつく最高級魚。

毎月二十日発行

寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中村 興 樹

発行人 中村 興 樹

発行所 新潟県寺泊町

ふるさとだより

郵便番号 九四〇一二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二二九番

振替番号 〇〇六二一三五四五

印刷所 吉野印刷株式会社